

13.08.15～20 涸沢～黒部周遊山行報告書(3日目・4日目)

M3 荒川 晶

⑤3日目(双六小屋～三俣蓮華岳～黒部五郎岳往復～三俣山荘)

昨日三俣山荘まで行ければ、今日は終日サブザック行程だったのだが、双六小屋止まりとなってしまったので(そのおかげで富山大の方々とは交流を深められました)、今日は少し早めに04:50出発。このテント場の朝は早く、02:00頃から起床される方々も多かった。

双六までの登りは、少々急登に思えたが途中からはなだらかになり、同時に高山植物の咲き乱れる中、遠景に槍穂高連峰を望むようになる。この日も東方向は雲が多く、綺麗なご来光は見られなかったようだ。右手には弓折岳・抜戸岳・笠ヶ岳と連なる稜線が美しい。ゆっくりと歩き1時間ほどで双六岳頂上に到着。ここでようやく五郎のカールを抱える黒部五郎岳や北の俣岳がその山容をあらわす。槍穂高の荒々しい景観ばかり眺めていた自分にとっては、この周辺の山々の穏やかな光景はまるで別世界に来たように見え、この距離を歩くだけでこうも山の景色は変わるのかと感じた。特に朝の斜光線を受けた五郎のカールはとても綺麗だった。長居したい気持ちを抑え、記念写真を撮影してもらった後ははやばやと三俣蓮華の山頂を目指す。なだらかな稜線を歩くこと、1時間少々で三俣蓮華の山頂に到着。双六方面に向かう登山者とも多くすれ違った。



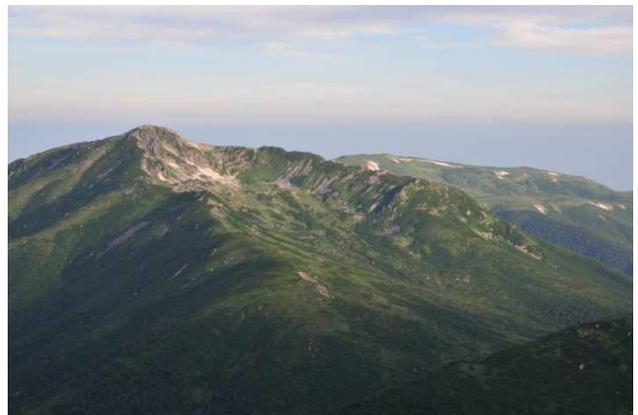
夜明け前の双六小屋を出発。まだ起床したばかりの人や、既に支度を整えた人が入り混じる。



双六岳山頂に向かう途上のお花畑と、鷲羽岳。



槍穂高連峰。去年は蝶ヶ岳からこの展望を眺めたが、こちら側からは槍がひととき目立つ。



柔らかい朝日を受けて輝く、五郎のカールと黒部五郎岳、そして北ノ俣岳。



双六岳に向かう途上より、笠ヶ岳方面、合わせて雲間に浮かぶ焼岳・乗鞍の山容も美しい。



黒部五郎をバックに記念写真。ちょっぴりピンボケ。



三俣蓮華までの道はなだらかに続く。鷲羽・ワリモ・水晶・赤牛と立山までが望めた。



槍穂高連峰をバックに、三俣蓮華岳山頂より。山頂は広がった。

三俣蓮華の山頂は長野・富山・岐阜の 3 県の県境であるとともに、北アルプスの主脈である槍穂高連峰と、黒部五郎方面へと向かう刃立山連峰と、また鷲羽岳方面へと伸びる後立山連峰の 3 つが合流する山なのだが、その事は山頂ではあまり触れられておらず、富山県と長野県が立てた普通の標識が佇んでいるだけであった。

山頂でサブザックに荷物を纏めて、黒部五郎岳のピストンへ向かう。稜線を歩くルートで、所々に咲く高山植物が綺麗だった。黒部乗越の手前で一度樹林帯に入り、急下降する。登り返しの辛さを想像して岩の多い登山道を下り、赤い屋根の小屋が見えてきたら、そこは黒部五郎小舎。湿原の中に佇む、雰囲気の良い小屋であった。少々休憩を挟んで、圏谷ルートで黒部五郎岳を目指す。始めは湿原の中を歩くが、次第に道は五郎のカールの中に入り込む。ここの景色は、本当に世界に戦争はあるのだろうかと思えるような素晴らしいものであった。途中小さな沢があり、あまりに綺麗なので恐る恐る水を飲んでみた。本当においしかった。後で地図を確認したらちゃんとした水場であったので、もっと心おきなく水を飲んでおけばよかったと後悔。この後カール内から稜線に向けて登るジグザグ道を抜ければ、一気に周囲の山々の展望が広がる。黒部五郎という名のもととなったゴーロ状の岩稜を歩くうちに北ノ俣岳からのルートと合流する。山頂はそこから 5 分ほど。折悪く、クラブオーリズムの団体と居合わせてしまったのが少々残念だったが、ここでも周囲に広がる大展望を満喫することが出来た。



これから目指す黒部五郎と北ノ俣岳を目指して心地よい稜線歩き。



右を向けば黒部川の峡谷の向こうに雲ノ平が広がる。中央右には鷲羽岳・その隣にワリモ岳。



左を見れば抜戸岳・笠ヶ岳の稜線が聳える。確か笠の形をしているかと納得。



赤い屋根が目立つ黒部五郎小舎。帰り道に記念にタオルを購入。



途中にあった沢。黒部川の源流の1つ。この水は美味しかった。

(左上) 五郎のカールの中を歩く。世間の喧騒を一切知らないかのような静謐な場所。



(左) カール東寄りに付けられたジグザグ道を登る。コバイケイソウと黒部五郎岳。

黒部五郎岳からの展望をひとしきり満喫したのちは、今度は稜線ルートで下山する。圏谷ルートから見たカールの稜線を歩くことになる。岩稜帯やハイマツの植生の中をかいくぐる箇所もあり、ルートを見誤りやすかったが、ペンキ印を忠実に辿れば迷うことはないと思う。黒部五郎小舎まで誰とも出会わなかったが、総じて歩きやすい道であった。正面に槍穂高双六鷲羽水晶の大展望を眺め、左手にはカールを見下ろしながら楽しむことが出来て心地よかった。ここで軽食を食べて再び三俣蓮華まで。最初の登り返しが少し面倒だが、それでも標高差は可愛いもので、サクサクと歩いて 1 時間半で到着。三俣蓮華岳より少々下った所に分岐があり、そこに荷物を置いてくれば三俣山荘まではショートカット出来るが、もし晴れていたら西からの光線に輝く槍穂高連峰が見えるはずだと思い、山頂に荷物を置いてきた。ただこの日は午後からガスが出始め、山頂はガスに覆われていて期待した展望は得られず、無駄足に終わってしまった。それでも昼過ぎまで快晴に恵まれて非常に幸運であったなと思い、やっこらせと再び 80L ザックに荷物を詰め誰もいない山頂を出発。山頂直下の急なザレたジグザグ道に難儀しながら降りてくると、丁度昨日お世話になった富山大の人と遭遇。今日は双六～三俣山荘～鷲羽～水晶と往復してきたらしい。羨ましい限りである。ここから三俣山荘まで下り、幕営。幕営後に三俣診療所に顔を出してきたのだが、忙しそうだったので早々と切り上げ、夕食を作って、三俣山荘の喫茶スペースでしばしくつろいで就寝。夕刻にはガスが上がり、鷲羽岳の山容を間近に楽しむことができた。



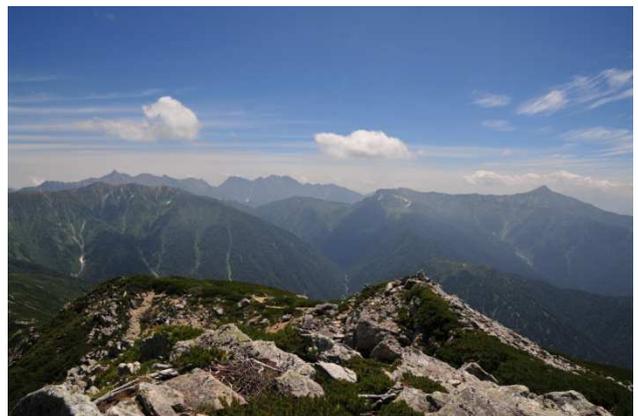
黒部五郎岳山頂にて記念写真。ここも快晴。百名山は 27 座目である。



山頂より。手前はカールの稜線で、奥は左から薬師岳・劔立山・赤牛岳。



山頂よりカールを俯瞰しながら。遠景には左から、水晶・ワリモ・鷲羽・三俣蓮華岳。鷲羽三俣蓮華の間には燕岳が見える。



さらに右に目を移せば、双六の向こうに槍穂高連峰を一望。その右側に笠ヶ岳。



なだらかな稜線が特徴的な北ノ俣岳と薬師岳。



ゴーロ状の山頂。名前の由来にもなっているが、ここ周辺以外はさほどゴロゴロしていない。



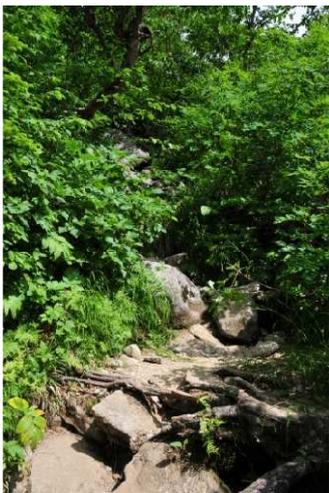
稜線ルートを歩きながら後ろを振り返る。ここから見る黒部五郎岳も綺麗である。



花崗岩質の岩稜帯を抜けるが、ペンキマークもあり道はしっかりしている。



湿原の中に佇む黒部五郎小舎。



(左上) 最後は沢筋を下るような道になり、黒部五郎小舎へ向かう。

(左) 黒部五郎小舎からの登り返し。日差しも強く少々しんどかった。



テント設営。鷲羽岳をバックに。入口を鷲羽岳と反対側にしてしまったのは今でも後悔している。



夜景。月が辺り一帯を明るく照らしていた。

⑥4 日目（三俣山荘～鷲羽岳～ワリモ岳～祖父岳～雲ノ平散策～高天原温泉）

今回の山行もここから後半戦に入る。この日は高天原温泉まで歩こうと思っており、早めに起床したが、ガスっていたので、少し待てば晴れるだろうと思い2度寝し、出発は05:45となった。昨日見えていた鷲羽岳だが、天候もガスが抜けず強風が吹き付けガレ場が続き登りは結構つらかった。山頂手前で鷲羽池を眺め、訪れようか一瞬迷ったがスケジュールの都合上パスし、花崗岩の目立つ山頂へ。ガスは結局抜けず、強風で視界ゼロの中でしばし休憩。今日は双六に行くだけなので、山頂が晴れるまで待つと言っていたおじさんが1名いた。

展望が得られなかったのは残念だが、この先の行程も長いので鷲羽岳を後にする。思っていたよりもしんどい岩稜帯が続く中、ワリモ岳を通過し岩苔乗越へ。丁度このあたりが黒部川の源流のようだ。昨日歩いた黒部五郎のカールとも同様、中流域の荒々しい溪谷からは予想もつかない穏やかな景観である。

ここから祖父岳を目指して再び歩く。ザックが重いのと視界が晴れないのとで足取りは重く、コースタイムよりも少々時間をかけて祖父岳に到着。このまま視界の晴れないまま1日を過ごすのかと思っていたら、少しずつガスが晴れてきた。玄武岩の様な黒っぽい岩がゴロゴロした斜面を下り、雲の平に入った。



出発時に三俣山荘。小屋とテント場は徒歩5分ぐらいの距離にあり、トイレや水場などは少々不便かもしれない。



鷲羽岳への登り登山道はガスに覆われていた。この付近から湯俣温泉に抜ける伊藤新道が分岐していた。



ガスの一瞬の切れ間に鷲羽池を撮影。次回時間があれば立ち寄ってみたい場所。



鷲羽岳山頂。今山行では珍しく展望 0。でも記念写真は一応。これで百名山は 27 座目。



鷲羽岳一帯はガレ場を中心に所々にこうした岩場も。思いのほか慎重さを要する。



ワリモ岳を過ぎるとガレ場は少なくなり、ザレた稜線を歩く。



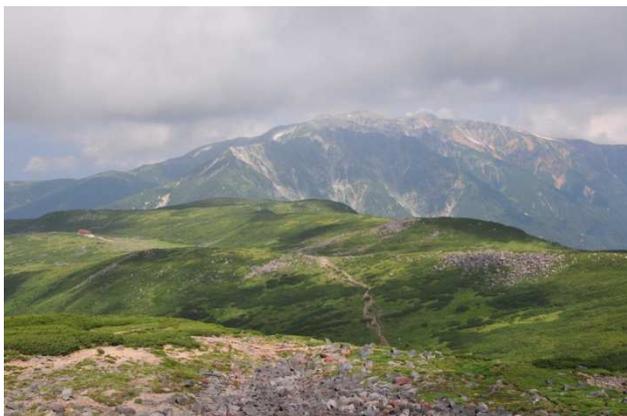
祖父岳に近づくとつれ、コバイケイソウ咲き乱れる穏やかな稜線となる。少しずつガスも晴れてきた。



ケルンの立ち並ぶ祖父岳山頂付近。晴れば三俣、槍穂高の眺めが素晴らしいようだ。

雲ノ平に降り立った頃には、ガスは晴れ、周囲の山々が姿を現し始めた。テーブル状の台地からは周囲 360 度を見渡すことが出来、台地の端の向こうには薬師岳、赤牛岳、水晶岳、祖父岳、三俣蓮華岳、黒部五郎岳など名だたる山々がどっしりと横たわっていた。前々から素晴らしい場所だとは聞いていた

が、ここは本当にびっくりするぐらい素晴らしい場所であった。まずはザックを置いて日本庭園周辺までを散策。玄武岩質の黒っぽい岩の中にハイマツが茂る道を歩く。三俣蓮華や黒部五郎の眺めが良い。適当な所で折り返し、スイス庭園を訪れながら雲ノ平山荘まで移動。こちら側に来ると、水晶岳、赤牛岳が間近に迫り、北アルプス主脈からは外れるもののその雄大な山容に感動し、明日はこの稜線を歩くのかと思いを強くした。またこの頃には天気は快晴となったが、運良くライチョウに出会うことが出来た。ここに荷物を置いて、今度はアラスカ庭園付近へと足を延ばすと、地図には載っていないが裏日本庭園と呼ばれる庭園があった。その後祖母岳を往復して再び雲ノ平山荘へ。ここでカレーを食べて休息し、高天原方面への下りに備えた。お盆休みの最終日だからか、これだけの好天にも関わらず、殆ど人とは出会わなかったのも幸運であった。



玄武岩質のゴローの道を下っていくと、雲間から薬師岳が姿を現した。



日本庭園方面を散策。三俣蓮華の山容が美しい。



。



東には水晶岳が。道中出会ったおばさんに記念写真をお願いした。

(左上)

黒部五郎岳と北ノ俣岳のなだらかな稜線を眺める。

(左)

偶然出会ったライチョウ。水晶岳をバックに。



スイス庭園から水晶岳、赤牛岳。明日はこの稜線を歩く。



雲ノ平のテントサイトと背景の祖父岳。この頃にはすっかり晴れてきた。



木道を歩いていくとやがて雲ノ平山荘に至る。



奥日本庭園の看板と薬師岳。確かに日本庭園らしい風景がこの一帯には広がっていた。



祖母岳周辺より、水晶岳と雲ノ平山荘。水晶岳はこの付近から見るのが最も美しいのではないかと
思う。



祖母岳周辺、アルプス庭園より祖父岳と三俣蓮華岳。

このまま雲ノ平にテントを張り、思うがままにこの庭園地帯を楽しみたいという気持ちもあったが、山中に湧く温泉も捨てがたく、名残を惜しみながら高天原温泉に向けて出発する。高天原峠への道はゴロゴロした岩を渡り歩くような道で、重いザックを背負った身には少々堪えた。やがて道は樹林帯へと

入り、いくつかの梯子を下りながら高度を徐々に下げてゆく。途中木道と小さな湿原が広がっていた場所があった。出発して1時間半ほどで高天原峠に到着。ここで分岐を右に折れ、さらに道を下る。途中で高天原温泉から軽装で登ってくる人と出会った。この一帯にはテントを張れる場所がないことになっているので、雲ノ平にテントを張り、日帰りで入浴に来る人も多いのだとか。水量豊かな岩苔小谷を渡れば高天原温泉はもうすぐ。ワリモ北分岐からの道と合流して、左手にのびのびと広がる湿原を眺めながら歩いていると、高天原山荘が姿を現した。今まで毎日テント泊だったが、たまには贅沢をして小屋泊まりでも良いだろうと思い素泊まり¥5,500を払って宿泊。ビールを片手に、温泉の支度を整え15分ほど歩くと、河原に広がる天然の露天風呂があったのでここに入湯。幸い私が来た時には誰もいなかったが、周囲には遮るものがなかったのでどうするのだろうと思って周囲を見渡すと、川の対岸にきちんと覆いのある露天風呂が整備されていた。まあ別に構わないやとそのまま、今まで4日間の縦走と、明日の行程についてあれこれ思いを巡らしながら、1時間ほど入浴。途中でやってきたおじさんが近くにある竜晶池が良かったと言っていたので、上がった後往復してみることにした。15分ほどで静かに広がる竜晶池に到達。そこから少し歩いたところには夢ノ平と呼ばれる小さな湿原があった。時刻は18:40と、早くも夕闇せまる時間帯だったので、ゆっくりしたい気持ちも山々だったが足早に後にし、再び高天原山荘へ。月明かりに照らされながら歩く途中ではこれから温泉に浸かりに行く宿泊客何人かとすれ違った。小屋について急いで夕食の支度。食べ終わった頃には消灯時間となってしまう、慌ただしく床に就いた。



雲ノ平山荘から少々歩くと、奥スイス庭園に至る。この一帯からも周囲の山々が良く見渡せた。



途中小さな湿地帯と木道の道があった。遠景には水晶岳が。大分高度を下げてきた。

(右)
何箇所かあった梯子。
よく手入れされていた。



今回の山行で初めて、樹林帯の道を下る。木々の緑が目まぶしい。



岩苔小谷を渡る。豊富な水音が耳に心地よかった。



高天原近くの湿原。水晶岳が見上げるような高さに迫ってきた。



午後の光に照らされ、湿原が静かに佇む。



高天原温泉へ。あばら屋付きのお風呂もあったが、河原の露天風呂に入った。



(左上)龍晶池。静寂が辺りを支配していた。
(左)同上。夕焼け空の青が写りこみ、深いブルーに染まる池。



(上)夢ノ平へ。湿原の向こうには夕陽を受ける赤牛岳が。こちら静かな湿原であった。